

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 4 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370518

研究課題名(和文) 方言の統語構造に関する記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive study of syntactic structures of Japanese dialects

研究代表者

工藤 真由美 (KUDO, Mayumi)

大阪大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：30186415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：言語の活力がその内的多様性に支えられているとすれば、標準語文法とともに、方言文法の記述は極めて重要である。現在、世界中で消滅の危機に瀕した言語や方言の記録保存の必要性が叫ばれている一方、人々の移動の激しさが加速化している。国内における日本語の未来を考えるにあたって、人間のコミュニケーション活動の基本的単位である文の構造に関する調査研究を実施することにより、そのパリエーションのあり様を分析した。

研究成果の概要(英文)：The description of various grammatical structures of the dialects as well as the standard language is important, since vitality of language is supported on the internal diversity. Currently, the intensity of the movement of people has been virtualized. The documentations of the Japanese endangered dialects has become important. Sentence is the basic unit of human communication activities. In order to think about the future of Japanese language, this descriptive study of the variation of the syntactic structure was carried out.

研究分野：日本語学、言語接触論

キーワード：文構造 方言 日本語 琉球語 日系移民社会 形態論

### 1. 研究開始当初の背景

言語の活力がその内的多様性に支えられているとすれば、標準語文法とともに、方言文法の記述は極めて重要である。現在、世界中で消滅の危機に瀕した言語や方言の記録保存の必要性が叫ばれている。日本国内の諸方言のみならず、海外の日系民社会において日本語諸方言あるいは沖縄諸方言がどのような変容過程にあるかの考察も重要である。

### 2. 研究の目的

『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』(ひつじ書房、2014年)を公刊し、標準語、諸方言、海外の日系民社会における日本語のバリエーションの述語構造の分析を行った。述語は文構造の中核にあり、標準語に比べて、東北から沖縄に至る日本語ならびに琉球語諸方言の述語構造における形態論的形式は豊富である。一時的出来事か恒常的特性かを表し分ける時間的限定性や、話し手自身が直接目撃(経験)したことか間接的証拠に基づいて推定したことかという情報の根拠を示すエビデンスシャリティを表し分ける形式が発達している。これに対して非述語成分である主語や補語における形態論的形式は単純である傾向が見られる。このことから、述語構造との関係の中で、主語や補語の構造の分析を行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 研究代表者の母語である愛媛県宇和島方言を中心にしつつ、東北諸方言や琉球諸方言の談話録音データの文字化を行って、談話構造のなかでの文構造を分析する。国内の諸方言のみならず、南米(ブラジル、ポリビア)の日系移民社会ならびに沖縄系移民社会における日本語諸方言や琉球語諸方言とポルトガル語、スペイン語の接触状況を視野に入れて、既に録音された談話データにおける文構造にも注目する。

(2) 以上の分析を行うにあたって、標準語における談話構造の中での文構造と比較対照するとともに、世界の諸言語を対象とする言語類型論的観点ならびに言語接触論的観点からの研究成果を参照する。

### 4. 研究成果

(1) 人間のコミュニケーション活動の基本的単位は文であることから、文構造の分析が重要になるが、文は常に談話構造のなかにある。従って、談話構造との有機的結びつきの中で文構造の分析を行うことが必要不可欠である。このことから、述語構造との関係のなかで主語や補語の分析を行う前提として、文構造全体と談話構造との関係の分析を先行させることにした。その具体的事例として、標準語のノダ文を対象にして、談話構造のなかで、時間的限定性とノダ文との関係性を分析した。時間的限定性のある<完成 継続>

のアスペクト対立は、テキストの<継起 同時>という時間構造を形成する。完成相は、形式上は無標ではあるが、an event sequencer という最も重要なテキスト的機能を果たすのである。このような事象間の時間構造が重要であることに間違いはないが、同時に、事象間の<因果関係(条件づけ・条件づけられ)>や、<意義づけ><一般化><具体化><精密化>といった論理構造も複合化される。「ノダ」を伴う文が、このような条件付けを含む論理構造を形成することに間違いはないが、「ノダ」を伴わない文においても、時間的限定性の有無によって、この論理構造は形成される。しかも、この場合は、<説明され 説明>の構造でも<説明 説明され>の構造でもよい。有標の「ノダ」を伴う文は、無標形式の文では表現できない説明の構造(論理構造)の一部を担っている。

(2) 構文論研究の方法論を検討するため、鄭相哲(韓国外語大学教授)、佐藤里美(元琉球大学教授)、八亀裕美(甲南大学教授)、宮崎和人(岡山大学教授)、山東功(大阪府立大学教授)、小林英樹(群馬大学教授)との共同研究会を開催し、「奥田靖雄著作集刊行記念国際シンポジウム(2014年3月7日、大阪大学)において、奥田靖雄自身が「構文論研究の段階」とする第4期のなかの初期にあたる3つの論考(「文のこと 文のさまざま(1)」「文の意味的なタイプ その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい」「おしはかり)」を取り上げ、文の基本的な本質的特徴として、文の対象的な内容と陳述性、陳述性の中核にあるモダリティーとモダリティーの土台にあるモーダルな意味、文の対象的な内容とモーダルな意味の相関性、モーダルな意味による文の分類があることを示した。あわせて、文の対象的な内容を一般化するにあたっては、まずは主語と述語の両面において意味的なタイプに一般化する必要があること、また談話構造のなかで、ダロウを伴う文の意味構造が変容していくことを確認した。

(3) 国内の諸方言における文構造の分析を行うにあたっては、南米の日系移民社会、沖縄系移民社会において既に録音・文字化していた談話構造を分析することが有益であるという観点から、森幸一(サンパウロ大学教授)、山東功(大阪府立大学教授)、李吉鎔(韓国)中央大学校教授)、朴秀娟(神戸大学専任講師)との共同研究会を行った。その過程で、日本語や沖縄方言とポルトガル語やスペイン語との複合的な接触状況の分析にあたっては、社会的、文化的、心理的側面を総合化することの重要性が明らかになり、共著として『日系移民社会における言語接触のダイナミズム ブラジル・ポリビアにおける子供移民と沖縄系移民』を公刊した。第1章では、本調査研究における新たな視点とその

成果を述べている。注目したのは<子供移民>と<沖縄系移民>の存在である。第2章では、第3章～第5章における考察の前提となる本調査研究の特徴を述べている。言語生活調査、談話録音調査、文献の掘り起こし調査という3つのタイプから成るが、これらは相互補完関係にあり、言語接触と言語移行の過程を言語的側面と歴史社会的側面から総合的に考察するために必要不可欠なものであった。第3章では、現地生まれの2世ではなく、言語形成期以前に渡航した<1世子供移民>から、日本語から現地語(ポルトガル語やスペイン語)への言語移行が、急激にあるいは緩やかに起こってくることを指摘している。子供を伴った家族移民であったというブラジルへの日本人移民の最大の特徴が、日本語と現地語の言語接触と移行のダイナミックな様相を提示するのだが、この点は、北米の場合とは大きく異なるものであり、言語移行プロセスのモデル化において重要になる。第4章では、第3章における重要な分析結果の1つである<子供移民>の存在意義をうけて、これまで安易に使われてきた1世、2世といった分析指標では、ブラジル日系人をめぐる言語状況とエスニシティの分析は不可能であることを示している。第5章では、本土系移民とは異なる沖縄系移民コミュニティにおける3言語接触とエスニックアイデンティティの複合性の問題を考察している。最後に、補遺として、ボリビアの沖縄系移民コミュニティにおける談話録音調査の一部をCD-ROMとして入れている。

(4)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』で分析した時間的限定性について、鄭相哲(韓国外国語大学教授)との共同研究を行い、韓国済州島方言との比較を視野に入れて分析し、国際学会で研究発表を行った。『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』では、日本語の標準語には、一時的事象か恒常的事象かをマークする形態論的形式はなく、形容詞では「は」と「が」の違いとして、あるいは語彙的意味の違いとして表現される一方、諸方言には形態論的形式があることを指摘した。時間的限定性がどのようにマークされるかについて、東北方言、沖縄の与論島方言、韓国済州島方言を比較対象すると、3つのパターンが認められる。東北方言では、一時的事象であることがマークされ、与論島方言では、一時的事象であることが話し手の目撃性(体験性)と絡み合ってマークされる。一方、済州島方言では、2つの異なった形式である[handa] [hayemcheo]が形容詞に接続し、前者は恒常的事象であることを明示し、後者は一時的状態であることを明示する。なお、この時間的限定性に関わっては、談話論的、構文論的、形態論的、語彙論的観点を総合化して、5名の執筆者による共著として出版予定であり、平成25年度～平成27年度に

かけて、年5回のペースで合同研究会を開催した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

工藤真由美、動詞と日本語の多様性、日中言語研究と日本語教育、査読無、6号、2013、15-24

工藤真由美、新日本語学者列伝 <奥田靖雄>、日本語学、査読無、33巻2号、72-78

工藤真由美、方言の多様性と日本語の活力、日本教育、査読無、439号、2014、26-27

〔学会発表〕(計 11件)

KUDO Mayumi, Sangcheol Jung, The Episodic/Generic Distinction in Japanese, Ryukyuan and Korean Dialects, EAJS(ヨーロッパ日本研究協会)、リュブリャナ大学、2014

工藤真由美、時間的限定性とノダ文、中日対比言語学会、中国人民大学、2014

工藤真由美、日本語の多様性、中日国際シンポジウム、貴州財経大学、2014

工藤真由美、ウチから見た日本語、ソトから見た日本語、チュービンゲン大学ワークショップ、2014

工藤真由美、標準語の文法は整っているか、第6回中日韓日本言語文化国際シンポジウム、大連大学、2014

〔図書〕(計 1件)

工藤真由美、他、大阪大学出版会、日系移民社会における言語接触のダイナミズム ブラジル・ボリビアにおける子供移民と沖縄系移民、2015、318

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 真由美 ( KUDO, Mayumi )

大阪大学・文学研究科・教授

大阪大学・名誉教授(2015～)

研究者番号：30186415

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：